

車椅子利用者のために改良すべき点

Improvement Needed for Wheelchair Accessibility

Joseph Koval, Mokena, Illinois, jgtak@aol.com

[Post-Polio Health誌 Vol 23, No 2, 2007春号 Page 9 和訳：武田美千代]

車椅子を使っていれば、仕事、買い物、食べ歩き、旅行などができたのではないかと思ったことはありませんか？ 実際経験者が身近にいない限り、こんなことはあなたには想像もつかないかもしれません。この10年間車椅子を使ってきて、私は車椅子を利用しながら基本的な行動をとることがどれほど困難なことか痛いほど経験してきました。困難というより時には不可能でさえあるのです。

皆さんは“車椅子利用可能”という標示を見たとき、どう解釈するでしょうか。「車椅子利用者が建物に入ることができ、中の施設を利用できる」という意味にしか解釈しないでしょう。実はそれは「他の人の手をかりずに、車椅子に乗ったあなただけで施設を利用できるというわけではなく、公共トイレさえも一人では使えないこともある」ということを意味しているのです。多くの人はまだこのことに気づいていません。ADD（障害をもつアメリカ人法）では、小売店やレストランのような既存の建物に障害物がある場合、それを除去することがそれほど大変ではなく、費用もあまり高くつかない場合は除去するよう命じています。新たに建物を建設する場合、障害をもつ人が利用できるように整備することが義務づけられてはいますが、建物内の全ての場所が利用しやすくなっていることは稀なのです。

ショッピングセンターに適切な駐車場がないことも珍しくはありません。駐車場から店舗へのスロープの数が限られているために、無理に手を加えてスロープがわりにしたもの、よけいに危険な状態になっていることもあります。

ドアからの出入りも主な障害になっています。ドアが自動開閉式になっている公共施設は多くはありません。引き戸式の重いドアを、車椅子に乗ったまま、開けて中に入ることは困難なことです。もしドアに”レール“がついていると、後ろ向きに入らなければならないかもしれません。手動の車椅子の前車輪が小さいため、転倒してしまう可能性があるからです。

“p可能”という標示がドアに貼られている公共トイレは、ドアの開閉部が広がっているだけ、それと便器のところに手すりがついているだけなのです。車椅子がすべて入るほどの十分な広さがないものもあります。ですから車椅子から立ち上がり、トイレのところまで歩いていかないかぎり使えないのです。食事中にレストランを出て、別のトイレを探さなければならぬなんて想像できますか。

ホテルでの宿泊も車椅子利用者にとっては楽とはいえません。一階に車椅子専用の部屋が設けられていることはほとんどありません。火災や他の緊急事態が発生し、避難しなければならないときのことを考えると、上階の部屋に宿泊するのは不安です。“車椅子利用可能”となっている部屋には自動ドアがあり、クローゼットには手すりがついていて車椅子の高さに棚があるべきです。バスルームはロールインタイプ（巻き込み型）のシャワーが取り付けられていて、使いやすい浴槽、手すり、高さを考えたトイレ、移動しやすい広さが必要です。

車椅子利用者が自立する機会を得るためには、「利用しやすさを求めた」現行の（米国の）法律は修正されるべきです。そのためには既存の建物を改良したり、新しい建物を建てる際に、障害をもつ人が政治家や建築家、建物の持ち主にアドバイスをしたり、指導、教育することができるように、計画の段階から参加できる制度をつくる必要があります。我々がそれ

らを要求するのは当然のことだと思います。

Joseph Koval氏は2歳のときにポリオを患い、6ヶ月間は首から下が麻痺した状態でした。10年前に足を骨折し、自分で歩く力がなくなりました。今日、氏は手動式車椅子を利用してフルタイムで働いています。“車椅子利用者は自立をめざしており、自立する可能性をもっているにもかかわらず、車椅子利用者は仕事をするにも日々の活動をするにも援助が必要だという固定観念がまだ残っているのを実感しています。”

Translation by
Japanese Network of Polio Survivors
Masakuni Mukoyama, MD
3 Kuromoncho, Higashiku
Nagoya, Japan 461-0035